

原子力の建築／ポスト原子力の建築

——カタストロフィのなかで構築すること

ジェローム・レーブル

人目を引くものは何もない。事情を知らない者はよそ見をせずに通り過ぎていく。青空を背に浮かび上がったり、灰色の空に溶けたりする産業施設。目に入るのはこの施設だけ。

——エリザベート・フィロール『発電所』

敗戦後六十六年原子炉から白い煙 […] 地震と津波の島に原子炉桜咲く

——夏石番矢「津波と原子炉」

私たちはあいかわらずカタストロフィ「のなかに」いる。

——Ryoko Sekiguchi, *Ce n'est pas un hasard.*

当然のごとく、筆者の気持ちは二つの方向で揺れ動いている。一方で、日本という国と出会い、この原稿を執筆する機会に恵まれてとても満足しているが、しかし他方で、三重のカタストロフィに見舞われた日本の人々の状況を前にして悲しみを感じてもある。一連の地震、猛威をふるった津波、そして、福島原子力発電所。原発は崩壊し続け、人間と他の生物、大地と水を被爆させ続けている。

たったいま、私は一人称で本稿の口火を切ったのだが、ここからは一人称をなるべく使用しないようにする。というのも、これから私の論考は、ひとつあるいは複数のカタストロフィに関する省察、発話、文章からなる一ジャンルをなしているからだ。2004年に起きたスリランカの津波や、日本のカタストロフィの後で書かれた自伝や自伝的フィクションを読むにつれて、このような個人的な語りは生き残った人びとに委ねるべきだと考えるようになったのだ。別の語り方も可能で、例えば、沈黙の重みをともなう詩、作者の名において美辞麗句を排したクロニクルといった

語りが挙げられる¹。ところで、一人称の言葉の反対物は建築である。なるほど、建築にはたえず言葉がともなうのだが、同時に、建築の目的とは物質を編成することであり、建築は言葉にしないでこの目的を語る。かくして建築は沈黙したままカタストロフィを証言し、言葉を被害者たちに託す。カタストロフィに際して建築は持ちこたえることもあれば崩れることもあり、その理由は建築それ自体、ならびに建築が被る被害による。この事象は地震、津波、核爆発の事例でも、チェルノブイリや福島のような、核爆発とは異なる民間事故の場合でも明らかであるはずである。その周囲ではすべてが元の位置にあり、災害とは不可視の放射線であるようにみえる。ただし、そのような事態において建築は核心的である。この場合、建築とは発電所——原子力発電所——の建築か、英語でいう power station〔発電所〕の建築のことだ。この station は残存し続けると思われたものの、やはり持ちこたえられなかったものを指す。このような理由から、二重の目的あるいは二重の抵抗を鑑みて、私はカタストロフィのなかにあるこの建築について考察したい。つまり、一方で、私たちが待ち受けているのはこの世の終わりであり、もはやなすべきことも構築すべきこともないのだという破局論〔catastrophisme〕に抵抗することが大事だ。他方で、反対の幻想、つまりカタストロフィとは建築家と共同体に対してすべてをやり直し、再構築する任務を与えるのだ、という幻想に抵抗することも重要である。

ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館

遠く離れた場所から議論を始めよう。どのくらい遠くかというと、きわめて正確に、福島原発から 9478,57km 離れた地点からである。田中功起はこの「9478,57km」という数字を 2013 年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本館に仮設的に記した²。“Imaginary distance (or the distance from FUKUSHIMA)” と名付けられたこの作品は実は、同じペディメントに常設されていた Giappone〔日本〕の表示のごく近くに置かれている（写真 1）。この建物は実際に日本を体現しており、建物に入る人びとは日本を来訪する仕掛けになっている。実際の距離が想像上の防壁のようなものとして現れてくる。私たちは自分たちが思っているよりはるかに福島の近くに

¹ Cf. Ryoko Sekiguchi, *Ce n'est pas un hasard*, P.O.L., 2011, p. 46.

² 作品の写真掲載を許可してくれた田中功起氏に感謝申し上げる。

て、この日本館は見た目以上に危機に晒されているのである。

この効果は、同じく田中が考案し、藤川琢史が撮影した“*Painting to the Public (open-air)*”という題のパフォーマンスによっていっそう強化される。日本館の正面に置かれた「集团的行為」の写真は日常の場面を奇妙なものにし、不確実さを共有することを狙っている。自分たちが描いた絵を持って街中を歩くアーティストたちはちょっとした通行人の群れをなしており、また不可解なデモ集団を形成してもいる（写真 2）³。芸術による異議申し立ての力がこのように肯定されているのだが、その肯定の仕方はあえて空虚なままだ。その力はこの写真の沈黙と対をなしている。正面に置かれた写真はせいぜいアーティストたちを映し出しているだけであり、悪くすると標準的な都市建築の支配を示すものである。この写真が置かれた位置のおかげで、日本館にたどり着いた人びとには、建物から出てきた見学者たちがこのデモに参加しているか、あるいはそれを率いているように見える（写真 3）。このようにして見学者は日本に、カタストロフィの間近にいて、このカタストロフィに対する抗議に向き合うことになるのである。

2012 年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の日本館内で展示された主要作品「ここに、建築は、可能か [Architecture. Possible here ?]」と題されたミニチュア建築の集まりは金獅子賞を受けた。この集会的な作品は、何もない土地でクレーン車がタイヤと小石の山をあわだちく積み重ねる様子を背景にして、津波で荒廃した地域のユートピア的な再構築を表現している（写真 4）。この作品が明確にしているのは不安定さと異議申し立ての分割だ。

カタストロフィの後、一般的に人びとは、できるだけ早くすべてを再構築しなければならないと考えるのだが、その実現の可能性については疑問を抱かない。国家は責任をとっているようにみえるけれども、カタストロフィが進行するにつれて国家自身に降りかかってくる責任は回避される。共同体はこの不幸のなかで自らに運命を与え、ゼロから出発するために一貫したイメージをもつことになる大規模プロジェクトのなかで、固く絆を結び直すようにみえる。このような政治と共同体の飛躍はつねに犠牲者をなおざりにしておこなわれる。例として、広島と長崎の原爆投下後の再構築を挙げることもできるだろうが、ここでは戯画的とさえ言える他の例を取り上げよう。イタリアの（前）大統領ベルルスコーニが、前述したヴェネツィ

³ *Painting to the public (open-air) 2012*, Collective acts Billboard, Photo : Takashi Fujikawa, Created with Aoyama Meguro, Tokyo.

アではなく、やはり歴史的な都市ラクイラを襲った地震を厚顔無恥にも利用したことがある。ラクイラの中心街は住民が居住していた歴史的遺産だったが、彼はこの中心街を再び強固にし再開発することも、被災者たちを元の自宅に住ませることもしなかった⁴。ベルルスコーニは住宅を崩れたままにしておき、警察が管理する区画に避難民たちを閉じ込めたのだ。彼は被災者とメディアの接触をできるだけ制限しつつ、この中心街の隣に大々的に不動産を建設するという計画をメディアを通じて喧伝した。この事例が証明するのは、民主制において、カストロフィが社会体制の自壊をも引き起こしかねないということだ。なぜなら、共同体を再構築するという言説が、より切迫した試練——ある意味においてより困難な試練——、すなわち生き残った人びとに言葉と存在する権利を与えるという試練を覆い隠すからである。

ヴェネツィア・ビエンナーレの日本の作品はこのような第二のカストロフィに抵抗した。生存者に言葉を委ねるだけでなく、活動する可能性を与えることによって、まさに再構築の可能性を問い直したのだ⁵。伊藤豊雄、乾久美子、藤本壮介、平田晃久といった建築家たちは、津波に襲われた陸前高田市の住民たちと協働した。そこでは、さまざまな考えがあらゆる方角へ向かい、分散するというリスク——共同体がひとつに凝固するよりもましである——もあった。しかし、この分散を免れたのは、まさに「現われという考え」が現われたからである。つまり、構築物の土台は破壊された景色のなかにすでに存在しており、波が引いた後に残されていた。〔日本館の展示で〕地面に打ち込まれた木の幹は数多くの基礎杭である。実際に、建築において基礎杭より古いものはない。日本の先史時代、その歴史全体を通じて、基礎杭の跡が発掘されており、例えば、基礎杭は寺院の建築にも用いられている。基礎杭ほど普遍的なものはないのである。このことは明らかで、この日本館のあるヴェネツィアでも、あらゆる宮殿は干潟の島の沼地に埋められた杭の上に建てられている。たしかに、これらの杭は埋もれ始め、海拔が上昇し、ヴェネツィアはゆっ

⁴ Cf. le film de Sabina Guzzanti, *Draquila*, 2010, et Jérôme Lèbre, « Les Failles du monde », in *Lignes* n° 35, “Le Rebut humain”, juin 2011, p. 63-72.

⁵ Cf. 日本館の資料の他に、Ito Toyo, « Une maison pour tous », revue *Shin Kenchiku*, décembre 2011 [伊藤豊雄「みんなの家」、『新建築』2011年12月号], trad. fr. in *Archipel des séismes*, Editions Philippe Picquier, Arles, 2012, p. 173-179, et les articles en ligne <http://le-beau-vice.blogspot.fr/2012/09/faire-avec-faire-quelque-chose-faire.html>; <http://www.lesinrocks.com/2012/09/09/actualite/quel-habitat-apres-fukushima-11295959/>

くりとカタストロフィに近づいている。イタリアと日本から遠く離れたチリのチロエ島は地震に襲われ、二〇世紀でもっとも大きな津波（1960 年）に見舞われたが、なるほど、杭しか残らなかったヴェネツィアと反対のイメージがみられる。実際、この島では地面が沈下し、海水はまだ引いていないのだ（写真 5）。しかし、日本では海水は引き、新たな建築のための土台が残されたのである。

杭のうえに構築をおこなうことで（写真 6）建築家たちが直面したのは、きわめて特異な作品の連関を確保するという制約だった。段組み、空間の配置、開口部は異なっているが、垂直な柱、水平な床、斜めの屋根のコントラストはつねに確保されている。強力な堅固さと著しい脆弱さのあいだにも同様の均衡が見られる。この均衡が建築的ユートピアの核心において表現しているのは、同じ土地で再び起こりうるカタストロフィに建築が向き合うというアポリアである。つまり、地震や津波に耐えるためには、建物もまた譲歩しなければならないのである。建物もまた振動し、内部に水を入れなければならない。過度に圧縮され、堅固な建造物は真っ先に壊れ、そうした倒壊はもっとも危険だろう。まさにこうした明白な事実を私たちはあえて口に出さず、同時に決して考慮に入れることがない。こうして、日本の海岸線で起こる津波を防ぐはずの巨大な防波堤は粉々になり、波にさらわれ、何トンものコンクリートが弾丸となって家を破壊し、多くの死者を生んだのである。

〔被災地を〕即時に再構築しようという共同体の幻想に抵抗しながら、「みんなの家」プロジェクトは、別の仕方での建築であれば、建築はカタストロフィのなかでも可能であるということを強調した。このプロジェクトはユートピア的だが、それはこのユートピアが想像上の距離を介して位置づけられ、ただし、ユートピアを保護すると同時に脆くする、現実世界からの距離を明らかにするからだ。ここからユートピアの批判的な力が導き出される。つまり、ユートピアは離れたところから現実そのものが孕む脆弱さを明らかにするのだ。アトランティス〔海底に沈没した伝説上の島〕以来、ユートピアそのものに破局的な仕方で消滅するという傾向があるのだから、なおさらの話だ。かくして、ユートピアは即時の再構築と完璧な防御という幻想を問い直す。だからこそ、この日本館のミニチュア作品は別の構築物、つまり原子力発電所に対して言外に抗議しているのである。

原子力発電所の建築——ル・コルビジェの機能主義

原子力発電所は展示場でもなく、ヴェネツィアの宮殿でもない。原子力発電所とは産業の歴史に刻まれた産業用建築の集合体である。例えば、福島のような第一世代の発電所は重油専焼火力発電所にきわめて似ている。唯一の特徴的な違いは煙突の代わりに原子炉が立てられていることだ。たとえば、ポーシュヴィルの重油専焼火力発電所は建物全体のなかに（重油）ボイラー四つを含んでいるが、このエネルギーが工業の旧世代に属しているというしるしとして煙突が背景に残っている。反対に、フェッセンアイムの原子力発電所は、エネルギー生産に革命を起こし、大気汚染を防ぐとされる原子炉二つを公然と見せびらかせている（写真7）。

このような進化をたどってきた発電所は、従来の兵器から核兵器への移行という別の進化とは一度も遭遇しなかった。民生用の原子力は軍事用の核ではなく、産業と関わっている。フェッセンアイムを見ると、原子炉に原子力エネルギーが集中しているように見えるので、発電所内の他の箇所もまた放射能をさまざまな度合いで帯びているということを考えさせるきっかけが何もない。それは各々の建物の画一性によるものだ。それらの建物は使用済み燃料棒の貯蔵庫、冷却回路、制御室といったきわめて多様な機能を収容している。ただ、それらはすべて類似しており、すべて純粋な立方体である。つまり、収容されているものが何であれ、建物の機能は収容することになり、この点で完全に機能的なのだ。福島の発電所はこのような建築上の一体性という方向において、新たな一步を踏み出している。外から丸見えの原子炉建屋は立方体の形をしている。なぜなら、建屋内の多様な要素（タンク、使用済み燃料棒のプール、テルハー〔物をつり上げて高架軌道上を動く運搬車〕）はコンクリートと鋼鉄でできた建造物のなかに収められ、閉じ込められて外から見えなくなっているからだ。それらの要素は巧みに組み込まれているので、原子力発電所は煙突のない火力発電所に瓜二つである（写真8）。

これら二つの種類の発電所は他の何にも似てないという点において、ますます互いに似通っている。それらは本当に何ものでもないといった雰囲気、危険であれ無害であれ、産業用建築物の特徴である凡庸さを誇張する形で構築されている。したがって、そもそも危険という意味が成り立たないので、危険が表現されることも否定されることもないのだ。ただし、何にも似ていないことで、これらの発電所、とりわけ福島の発電所はすべてに似ている。実際、立方体という形は、建築におい

ては基礎杭にもとづいた建築物より普遍的である。そういうわけで、福島は最終にある精密な建築に似ている。すなわち、考えられるすべての活動を収容し、立方体という画一化した形のなかで完全に統合させる集合建築に似ているのである。他の街に完璧に類似しているという特徴をもつ街の建築に似ているのである。ル・コルビジェが素描したそうした類の街はユートピアのようであり、むしろユートピアそれ自体である。「この街を知っている者はすべての街を知っている。というのも、すべての町はその土地の自然が許すかぎり、正確に類似しているからである。だから、私はどんな街でも区別なく描写することができる」とトマス・モアは述べ、ユートピアの島の街アーモロートの描写をしたのだった。

両大戦間期において、ル・コルビジェの建築的機能主義によって、ユートピアの都市の形式が表明された。このユートピアの調和は、普遍的平等、節約、簡素さ、純粋な線といった原則に基づいている。ル・コルビジェは居住形式の普遍性や連続性、つまり立方体に革命をもたらそうとした。日本の伝統家屋に影響を受けた彼は、杭の上に建てられ、その下に〔人々が〕循環する空間を解放する支持構造を〔日本家屋の〕立方体のなかに見つけた。この構造はまた、いくらでも変容しうる内部空間を開き、思いのかぎり窓を引き延ばすことを可能にする。建築上のユートピアは実現可能なレヴェルのプランであり、そのことを例えば、ル・コルビジェの弟子である吉阪隆正がデザインしたヴェネツィア・ビエンナーレの日本館は示している。しかし、この機能主義的ユートピア自体は経済的で普遍的な建築を目指していたために、規格通りの実現を保証するものの、自らが掲げる諸原則をその経済効率ゆえに侵犯してしまう。かくして、機能主義はカタストロフィ以後の所産という教条となり、例えば、第二次大戦中に爆撃された街の再構築などに適応される。その後、カタストロフィの所産という教条が幅を利かし、例えば、七十年代における郊外の構築がこれに当てはまる。基礎杭に代えてコンクリートの床の上に立方体を置くだけで、窓は小さい正方形となるが、内部空間の変容はアパートでの生活の要請によって固定されてしまう。理想の街は戦争後に再び居住すべき人びと、そして労働者階層の人びとを垂直方向にストックする場所となり、街は自閉的な同一の建物を無限に反復するようになる。このような理由から、福島は最終的に七十年代の都市建築のモデル、つまりこの発電所がエネルギーを備給する街のなかでもっとも近代的な建物と一致するようになるわけである。何百人もの人を雇い、街にエネルギーを供給するこの発電所は街のようである、いやむしろひとつの街なのである。つまり、

かくして民生用の原子力は軍事用の原子力や産業の危険との関係を否定するに至ったわけである。

ル・コルビジエによってデザインされた三百万人が住むユートピア都市と福島原発所とのあいだには、想像的で批判的な距離、ユートピアと現実を区切る距離が設けられる。この想像上の距離は、ヴェネツィアの日本館と福島のあいだでは保持されている。しかし、この距離は、カタストロフィのなかで構築する機能主義が教条的に実現されることで否定される。かくして、福島は立方体という無意味な形へと退行することで、もはや見かけ上の距離でしかないユートピアの勢いを維持する。窓も変容しうる空間もない原子炉建屋のコンクリートの塊にはさまざまな要素が危険なほど隣接して含まれている。つまり、立方体、使用済み燃料プール、炉心溶融物に耐えるために作られたわけではないコンクリート製の床、地面の上に直に建てられ、冷却回路に水を注入するために海の近くにあるものの、津波に耐えることができなかった建物、といった要素である。

新たな発電所と新たな建築——クロード・パランの斜めの機能

〔日本のカタストロフィの後、〕ただちに次のような結論が導き出された——古い発電所を解体しなければならない。福島のカタストロフィを考慮して、さらには、民生用の原子力が稼働され始めた時から起きた発電所のあらゆる事故を踏まえて、より優れた方法、別の仕方で構築しなければならない。そうすれば、発電所の安全と性能が同時に向上する——これは原子力発電の構築と供給に携わるあらゆる会社がおこなう言説だ。例えば、福島原発が建設された際、放射性物質の噴流を制限するために、使用済み燃料のプールと原子炉が隣接して設置された。ところが、福島のカタストロフィの際にプールは原子炉によって破損してしまい、その結果、いまや両者は遠ざけられた方が安全だと判断されている。またチェルノブイリ以来、原子炉を格納するコンクリートの床は、炉心溶融に耐え、原子炉を閉じ込めるのに十分なぐらい厚くしなければならないということも知られている（本稿末尾に掲載した、原子力安全当局による欧州加圧水型（EPR）原子炉の建築基準規定を参照されたい）。

過去の事件だけに目を向けていると、それらの事件がカタストロフィ（大惨事）

に至ったのはまさに未来予測が欠けていたからだということが忘れられてしまう。すなわち、発電所の安全対策は起こるかもしれないカストロフィではなく、現実起こったカストロフィに基づくべきだという未来予測が欠けていたのだ。当然ながら、起こるかもしれないカストロフィそのものを検討することは不可能である。ジャン＝ピエール・デュピュイによれば、不可能なものを検討するただひとつの方法は、完全無欠のカストロフィを想像することであり、こうした形式的な議論だけで原子力発電をやめられるはずである。とはいえ、完全無欠なカストロフィが実際に起こることを予測することは潜在的なものに対する思考と矛盾する。つまり、未来が潜在的で予測不可能なものである以上、原子力とは危険な移行期にすぎず、原子力に代わる根本的に新しい発明が待ち望まれているのだと想像することもできるのだ。原子力がもたらすカストロフィの終結も、究極的なカストロフィも、潜在的には同様に考えることができるのである。現に両者は空虚な予測にすぎない。将来について妥当性をもつ形式的な議論などというものはなく、なぜなら、未来は形を持っていないからである。予測は予測不可能なものに対しては閉ざされており、それゆえ、いかなる技術上の安全対策も発電所をカストロフィから保護することはない。さらに言えば、発電所がカストロフィから保護されていると信じれば信じるほど、発電所はますますカストロフィに曝されていくのである。

たしかに未来は形をもたないのだが、しかし、未来の形がかつてどのようなものであったか、いまどのようなものであるのか、これからどうなるかを定める建築は即物的な形をもっている。フェッセンアイム原子力発電所を例に挙げよう⁶。この発電所が七十年代のものであるために経年劣化していることは私たちの目に明らかである。予定された三十年の稼働期間を超えているこの発電所が地震が起きる地域に位置し、不安げな脆弱さの兆候をすでに示していることは誰もが確認できる。ついに私たちは真剣にこの発電所を停止し、解体しなければと考える。しかし、建築家の目からすれば、構築された時点で発電所を解体する必要性は生じている。クロード・パランが1975年前後に（まだ未稼働の）この発電所を視察した経験に触れている一節を引用しよう。「フェッセンアイムの発電所を見に行ったのですが、おぞましくて火力発電所と同じぐらい醜いものでした。あの光景をわたしはいつまでも覚え

⁶〔訳注〕アルザス地方にあるフェッセンアイム（Fessenheim）原子力発電所は1977年に稼働したフランス国内最古の原発。2012年の大統領選挙で当選したオランド大統領は公約通り、2016年までのフェッセンアイム原発の閉鎖を決定した。

ていることでしょう。フェッセンアイムはフランスでライン川と並行に建てられていて、周囲にある薄紫色の小丘からくっきり浮かび上がっていました。この景色のなかに、巨大なくぼみを、百メートルほどのくぼみだって描くことができたでしょうに。そこで私は何もかもに手をつけなければならないと思ったわけです」⁷。

この発言を当時の文脈に置き直してみよう。日本や他の国々と同じように、フランスでも 1973 年の石油危機の後に原子力への移行を掲げる一大プログラムが開始された。火力発電所という旧来のモデルに依存しては原子力発電所を何十基も建築することはできないと考えられていた。膨大な量の水で冷却する必要があるので、原子炉は河や海のほりとといったフランスでもっとも美しい場所に建設されなければならない。技術者も住民もすでに分かっていた事故のリスクのために、この美しい景色とできるかぎり調和した、心を落ち着かせるような建物を想像することが求められた。したがって、フランス電力公社（EDF）の設備部はクロード・パランを含めたわずか九人のグループに、技術者と協力して新たな発電所の設計図を練り上げるという役割を与えたのだった⁸。

実際、クロード・パランは自分が何をなせばいいのか、非常に明確な考えをもっていた。ル・コルビジェの弟子であった彼は、たんに装飾をするという役割、建築家は技術的な建築物を事後的に飾りつけるという考えを一切認めなかった。建築というものはすでに経済、技術、機能に関係しており、建物のさまざまな要望に形を与えられ、十全に実現されなければならない。したがって、建築家たちは技術者たちとたえず協力して建築プロジェクト全体に関わるべきである。こうした主張をパランはフランス電力公社の設備部に認めさせた。

しかし、パランは、ル・コルビジェが掲げる他の原理に対しては根本的に反対していた。この数年前に、彼は自分の原理を、ポール・ヴィリリオとの共著による、まさに「建築原理 [Architecture principe]」と題された雑誌で表明していた⁹。それによると、機能主義は建築のもっとも古い教義である直角の支配を復活させただけだった。機能主義は周囲の環境との関係を顧みず、周りから閉ざされた立方体という形に到達した。「建築原理」誌からすれば、立方体の形か有機的な円形の建築を試す

⁷ Magalie Rastello, « Entretien avec l'architecte Claude Parent », *Azimuts*, No. 31, 2008, pp. 69-70.

⁸ Cf. *Ibid.*, et Coll., *Claude Parent – L'Œuvre construite – l'œuvre graphique*, catalogue de l'exposition du même nom, Cité de l'architecture et du patrimoine, 2010, éditions HYX, Orléans, 2010, p. 280-295.

⁹ Paul Virilio et Claude Parent, *Architecture principe, 1966 et 1996*, Editions de l'imprimeur, Paris, 1996.

か、といった時代遅れの二者択一にとどまっていることはできない。というのも、両者の妥協策であり、かつひとつの到達点にほかならない「斜めの機能 [fonction oblique]」という解決策があったからだ。斜線は壁を坂に変え、壁は屋根や床になる。壁はもはや、通行人が越えられない障害物ではなくなる。壁の層は耐力壁と比べてかなり厚くなる。かくして建築は地面との接触を回復し、地面との対話を始めるのである。「斜めの機能」の力によって、物質を使うときにまったく譲歩しなくてもよくなり、さらには、生のコンクリートを用いた建築（写真 9）が肯定されるようになる（1973 年の作品「横断——内部 2」を参照されたい）¹⁰。かくして、クロード・パランはフランス電力公社からの挑戦、つまり発電所がかかえるコンクリートの塊をフランスのもっとも美しい風景に統合するという挑戦に屈しなかったことが分かる。

パランらの集団作業はまず、フランス電力公社の設備部に二つの研究方針を与えた¹¹。そこでは有機的な形と斜めの機能を備えた反機能主義が適用されている。つまり、建築家たちは円の形、とりわけ建物を段状に構築することを特別視した。段状にしたおかげで、建物は地面から冷却装置の塔にまで到る（写真 10）。コンクリート製の巨大な煙突は水蒸気しか吐かない新世代の発電所の証しとなる。あるインタビューでパランはフランス電力公社の幹部らの言葉について語っている。「みなさん方が運営する原発においてもっとも美しいもの、それは汚染されていない煙が立ち上り、白い水蒸気を発して、風景を損なうことなく巨大な模様を形づくる点です。ウラニウムとかいう物質を電力に変えるという真の神話のしるしは住民にとって何でしょうか。この煙こそがそのしるしなのです」¹²（写真 11）。かくして、パランたちは非常に美しい空気冷却器を喜んでデザインしたが（写真 12）、この分野では技術者たちが彼らにさほど工夫の余地を与えなかった。反対に、建築家と技術者らはよく意見交換をおこなって「機械室をつぶし」、「原子炉の円柱の幹全体を包み込む一連の形」¹³、つまり非常に大きな塊の冷却装置の塔を特権化した斜線の構築をお

¹⁰ 建築作品のデッサンと写真の掲載を許可してくれたクロード・パラン氏に感謝申し上げる。
'Le transversal - Intérieur 2', 15 mars 1973 © Collection DAF/Cité de l'architecture et du patrimoine,
Archives d'architecture du XX^e siècle.

¹¹ Électricité de France (EDF), Direction de l'équipement, Études de Claude Parent, « Recherche sur l'architecture des centrales nucléaires », janvier-février et juillet-décembre 1975.

¹² Cf. Magalie Rastello, *art. cit.*, p. 72.

¹³ Claude Parent, *Architecture principe*, *op. cit.*, janvier-mars 1975 p. 15, juillet-décembre 1976 p. 2.

こなった。これらの試みは、パランが建築を手がけたカットノン原子力発電所の建設に見られる（写真 13-14）。

ところで、建築以上に人々を危険に曝らし、またそれ自体が危険に曝される芸術はない。公的な仕事として建築を原子力に役立てたことによって、クロード・パランはこの職業のもっとも敏感な点に触れ、大きな論争を引き起こした。ところが、彼にはこうした論争に応答するための理論的な蓄積と言葉があった。道徳的な躊躇を示すことも、いささか軽率に挑発の意欲を示すこともなく、パランは建築に関する自分の立ち位置そのものを力強く擁護した——建築が死ぬのは、それが過去にしがみつくととき、または過去の同じ教義に相変わらず立脚する近代的な模倣をひたすら構築し続けるときである。建築家はリスクを引き受けて、未来のために構築しなければならない、と。パランによる作品展示の紹介文によれば、建築家とは「来たるべき将来への並外れた信頼」を「特権的に抱く人びと」であり、「物体と一体化した信仰をもっている」¹⁴。

いかなる道徳的な躊躇をも示さない場合、そのような信仰を抱くこと自体が問われることになる。パランはこのとき、「来たるべき将来への並外れた信頼」を語っている。したがって、この信仰は未来の脆弱さ、カタストロフィの可能性への意識を含んでいる。建築家が何かを構築するのは、将来がたえず危険な状態に置かれているにもかかわらず、あらゆるものに抗って将来を信じるからである。やはり同じ紹介文の冒頭から目につくことだが、危険はすでに現存しており、カタストロフィのしるしはすでに存在している。パランによれば、地球はもろもろの物質が融合したものであり、「そのことが恐るべき力を持った天災を引き起こす」。そのとき、人間の偉大さは恐怖を克服することにある。人間は「ヴェスビオ山のふもとやロサンゼルス of 巨大な断層の上に住むことを恐れない」。そして「地震が街を破壊しつくしても、[住民たちは] 街の瓦礫を片づけて再び構築する——しかも、同じ場所に好んで構築する」¹⁵。要するに、将来への並外れた信仰をもたらしものはこの破壊に対する感覚である。そういうわけで、フェッセンアイムを眺めるパランは、その建物のうちに風景のくぼみを見てしまうのだ。あたかも発電所は存在するというただそれだけの理由によって自壊するかのよう。破壊のなかで構築することこそが建

¹⁴ Claude Parent, « Les Outils de l'architecte », in *Claude Parent – L'Œuvre construite – l'œuvre graphique, op. cit.*, p. 9.

¹⁵ *Ibid.*

築の原理中の原理である。建築家は「壊れないと自称する」容器をつくるのだが、しかし同時に、あらゆるものが壊れる可能性があり、あらゆるものが必然的に壊れることも知っているのである。ここでパランは自らの職業の核心に触れている。彼が「並外れた信頼」と呼ぶものは、関口涼子がいう「関東大震災に遭遇したいという密かな欲望」を浮き彫りにする。関口は何人かの日本の建築家にこうした欲望を察知して驚愕するが、それは彼らの構築への欲望の恥知らずな心底をなしている。建築家の告白にとどまらず、パランによれば、まさに建築物はこうした欲望を払いのけつつ実現するために、これを表明しなければならないのである。

破壊こそが構築の根拠にほかならないという主張は、パランが原子力にかかわる以前、「建築原理」誌で「斜めの機能」¹⁶についての仕事をした時点からきわめて明瞭である。斜線とは世界の不安定さの表現であり、トラウマにしたがうあらゆる垂直構造から生じるものだ。斜線は崩れ続ける限りにおいてもっとも安定している。かくして、パランは立方体の形と手を切り、立方体を破壊へと導く。彼は限界の建築を実現したが、その建固さそのものに今にも亀裂が入りそうである。いや、斜線こそが亀裂であり、あらゆる亀裂は斜線なのである。かくして、ヴェネツィアでの建築ビエンナーレのために、パランは「破損したモノリス」（写真 15）を展示した。「穴の開いた建築に私はますます魅かれている」と、彼はすでに 1964 年に述べていたのだった¹⁷。

原子力発電所建築の人間化

フランス電力公社（EDF）はこのように、発電所建築の研究と、SEPTEN（火力・原子力の研究企画課）を含む事務所の設立を二十年ものあいだ、このひとりの建築家に任せていた。彼の文章やデッサン、展示会のミニチュアやその他の建築作品によれば、建築の機能とは、その自己崩壊という必然的かつ不可避免的側面を表現することにある。つまり、亀裂が入ったり穴の開いたりした建物をつくらなければな

¹⁶ Cf. Paul Virilio et Claude Parent, *Architecture principe 1966 et 1996* et Claude Parent, *Vivre à l'oblique*, l'Aventure urbaine, Paris, 1976 [『斜めにのびる建築——クロード・パランの建築原理』戸田穰訳、青土社、2008 年]。

¹⁷ Cité par F. Migayrou, « Détours de la quadrature », in Claude Parent – *L'Œuvre construite – l'œuvre graphique*, op. cit., p. 30.

らず、斜めの機能とは活動している破壊なのである（写真 16）。

フランス電力公社（EDF）の設備部はパランの文章を一度も読んだことがないの
 だろうか。パランの作品をひとつも見ていないのだろうか。デッサンでさえ閲覧し
 ていないのだろうか。建築家の研究ではなく、むしろ技術者の研究の方を読み、見
 て、研究したのだろうか。パランを採用したことで EDF は奇妙な間違いを犯したよ
 うにみえるが、それはこの建築家自身の間違いや過ちではまったくない。というの
 も、パランがいう将来への並外れた信仰は、原子力の将来に対する雇用主（EDF）
 の盲目にまさに正確に呼応しているからだ。つまり、パランは建築によって破壊の
 意味を表明したが、それは原子力計画に含まれていたため、この計画の指導者たち
 の目をくらませてしまったのだ。EDF の設備部向けの研究で、そして後の『原子の
 家』という著作で、パランは自分の建築が「全住民が将来、その場所を尊敬するこ
 と」¹⁸を保証するという。彼は嘘をついていない。ただ、風景への統合は彼にとつ
 て風景との争いであり、産業コンクリートと自然との対決であり対話なのである。
 パランは発電所と「ともに」、その「隣りで」住民たちが暮らすことができるように、
 「原子力発電所を人間的なものにすること」を狙ったと述べていた¹⁹。彼は嘘つき
 ではない。ただし、彼が言わんとすることは、建築家たちが人間たちのもつ偉大な
 狂気を抱え、その偉大さによって人間がヴェスビオ山のふもとやロサンゼルス
 の断層の上に住むということに等しい。冷却装置の白い煙は原子力という力の無害さの
 シンボルになるべきだと彼は述べている。この煙は人を欺くメタファーとして、発
 電所そのものが破壊をもたらしかねないという事実をその無害な部分で隠してしま
 うだけではない。〔風景と調和するように〕煙を彫琢することは破壊そのものを目に
 見せることであり、破壊された発電所から噴きだす煙をすでに予見しているのだ
 である。

これは誇張ではなく、むしろ、パラン自身、あらゆる行き過ぎを認めている。彼
 の『怒り——破壊することの必然性』という著作を引用しよう。「建築は焼き尽くす。
 建築は〔フン族の王〕アッティラのように破壊しつくす。建築は恐怖を喚起し、建
 築を日常的に管理するのは難しいと言うことができる。建築とは竜巻や台風であり、
 百年に一度の大津波、時速百キロで進む高さ二十メートルの水壁であり、その地域

¹⁸ Claude Parent, *Les Maisons de l'atome*, éditions du Moniteur, Paris, 1983, p. 46.

¹⁹ EDF, *Recherche sur l'architecture...*, janvier-mars 1975, *op. cit.*, p. 22.

すべてを飲み込むのである」²⁰。したがって、間違いなく、彼にとって発電所の建築とは発電所そのものの破壊を彫琢することなのである。

たしかに、破壊がつねにカタストロフィに至るわけではない。パランが同じく興味を惹かれたのは、発電所が五十年しか存在しないことだったようだ。十年かけて建設し、三十年稼働させ、十年かけて解体する。つまり、〔原発の〕有限な形は〔構築と解体という〕二つの現場のあいだの過渡的段階であり、この移り行きを体現している。建物の死を予定することで、パランにとって建築の最悪な死に様、つまり触れてはいけない遺産という形で永遠に維持され続けてしまう事態が回避される。パランは原発の通常の将来を思い描き、建物が解体されてできた空間は「予備の土地であり続けるだろう。あるいは、息苦しくなった都市の娯楽や休憩の空間となるだろう」²¹と考えている。彼の考えは革命的ではない。建築に入るひび、古い建物の解体とは過去を白紙に戻さずに、建築計画を恒常的に修正し続けることの一部なのである。

いずれにせよ、パランにとって、建築家は「暴力と攻撃しかもたらさない」。「暴力こそが建築を再建する」、「破壊することは創造することに等しい」²²。〔建築という〕表現の暴力が重要なのだが、ただし同じ暴力だからと言って、建物の解体とカタストロフィによる破壊の相異が示されているわけではない。しばしば、建築家というものは自分たちの作品をそこに住む人びとの日常生活よりも愛するといって非難される。パランは建築の死に様の良し悪しにあまりにも気を取られているために、建物が壊れたときに生じる住人の死が、硬直した建築の（悪しき）死と比べればましな死とされてしまう。何千人もの人びとの命を奪う津波と、〔前述のベルルスコーニのように〕住人の一斉退去を考案した上で郊外都市を一掃するという制御された行為は同じ次元にある。たんに生き残ることと比べて、「生き生きとした死、生の第二の顔」の方を讃えることで、危険なことに、パランは二十世紀初頭に未来派が用いていたレトリックに似通ってくるのだ。もっとも、未来派は機能主義のユートピアを壊そうとしたが、そうした破壊のユートピアは戦争ひとつ分ほど遅れていたのだが。こうして、パランが原発建設に関与したことの批判的な力がさらに強まる。『怒り』（1982年）の出版から一年後、フランス電力公社（EDF）の設備部長が『原

²⁰ Claude Parent, *Colères, ou la nécessité de détruire*, Michel Schefer, Marseille, 1982, p. 72.

²¹ Claude Parent, *Les Maisons de l'atome*, op. cit., p. 57.

²² Claude Parent, *Colères – ou la nécessité de détruire*, op. cit., p. 72, p. 54, p. 18.

子の家』(1983 年)に序文を寄せている。この序文からは、原発に盲目的な設備部長が何も読解しておらず、何も勉強していないことがわかる。同じ理由から、パランは建築について何も理解することもなく予算を決める出資者一般への低評価を平然と書き付けている。

ただし、この段階において、パランの理由づけ、むしろ破壊に対する彼の信仰は限界に直面している。なぜなら、パランは、ヴェスビオ山の付近と同じく、建設現場や原発付近に住む人びとに「生き生きとした死、生の第二の顔」を希望する精神をもってほしいとは思わないからである。むしろ、パランの目的は「人びとが発電所を承認するだけでなく、発電所に慣れ親しむ」ことだ。リスク社会にきわめて特徴的なこれらの言葉(承認する、慣れ親しむ)²³は『原子の家』の至る所に見い出される。それゆえ、建築家が「来たるべき将来への並外れた信頼」と「破壊をもたらす者」であるならば、彼らは破壊をもたらすだけでなく、ただ建築家たちだけが破壊を生きるのだという印象を受ける。言い方をかえれば、人間が(カタストロフィのもっとも近くで)生きるのを好むことと、住民が甘受しなければならないことをパランが意図せずに区別したことによって、社会に対する彼の盲目ぶりが明らかになる。原発の被害と危険に日常的に耐えている人びとを犠牲にする点で、彼は出資者たち同列に置かれるのである。ウルリッヒ・ベックが的確に指摘するように、「脅威の社会的状況」²⁴に対して各々の社会を介して結ばれる想像的かつ現実的な距離によって、グローバルなリスクは容易に受諾されるのだ。例えば、高橋哲哉や多和田葉子、またおそらく他の方々も強調しているように、東京に食料と電力を供給する東北地方は、この「脅威の社会的状況」のきわめて明瞭な例といえるだろう²⁵。

かくして、未来派的ユートピアと原発の安全対策、建築家の狂気と技術者の盲目は「壊れないと自称する」建物の構築という点で一致する。ところで、建築の手前あるいは彼方にある、この壊れないと自称するものは物質的には立方形よりも原始的な形、つまりトーチカ〔鉄筋コンクリート製の防衛陣地〕の形で実現される。そこで次に、このトーチカという形そのものに私たちの関心を向けてみよう。

²³ リスクに慣れ親しむことへの批判については、ギュンター・アンダースやウルリッヒ・ベックの議論を参照されたい。

²⁴ Ulrich Bech, *La Société du risque*, trad. par Laure Bernardi, Flammarion, 2003, p. 41 [『危険社会——新しい近代への道』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998 年]。

²⁵ Yoko Tawada, *Journal des jours tremblants. Après Fukushima*, Verdier, p. 109 sq.

トーチカの論理——脱物質化による建築の敗北

原発のトーチカ化は発電所の安全対策のたんなる一方法ではない。トーチカとは根本的な方法であり、床から天井までを一まとまりにする原子力の建築の土台そのものである。これは、画一的で終わりのない過程を通じて建物を画一化することである。とりわけチェルノブイリ以降、まず原子炉がトーチカ化されたが、福島原発の浸水以来、新たな規範によって、脆弱な部品と機械室の部品すべてをトーチカ化することが求められている。より大量のコンクリートを流し込めば、原初的な防御策の堅牢さは増すようにみえるのだが、それでもその不十分さは露呈し続ける。

パランのかつての友であり協力者であったポール・ヴィリリオは、初めて海を見たときに、この事実をはっきりと理解した。彼がはじめて海を見たのは1945年、13歳のときだった。というのも、戦争の最中、一般市民はフランスの大西洋岸に行くことができなかったからだ。すでにナチス・ドイツが西の国境に「大西洋の壁」という巨大な建設物を作っていた。この壁はトーチカの列からなっており、連合軍の上陸をことごとく阻止していた。今から見ると、これらのトーチカ建設は連合軍とドイツ兵数千人の命を犠牲にしたものの、ドイツの敗北を妨げることはなかった。1945年の終戦以降、この「大西洋の壁」は海に向かい、砂浜にじりじりと埋まっていく役立たずのブロックにすぎない。大人になったヴィリリオはこの「価値のないもの」を再訪し、ひとつの問いを提起した——「大西洋に面した場所で、どうしてこんな常軌を逸した光景が生まれたのだろうか」²⁶（写真17）。

この異常さはこれらの構築物が時代遅れだということによって説明される。一方で、この過去はいまだ現存している。というのも、トーチカは「地表にある軍事建築の最終形」であり、城塞の長い歴史の到達点だからだ。防衛建築はつねに攻撃兵器の性能に応じて進化する。攻撃兵器は自然の大災害に匹敵するものなので、城塞が物語るのは人間自身から身を守るために人間が費やした努力である。城塞はたえずもろいものだったが、それは攻撃への対応が遅れを伴うからだ。さらに、より原始的な建築へと退行することで、城塞はこの遅れを際立たせる。海軍や空軍による攻撃にトーチカは堪えられると想定されていたが、その「すさまじい攻撃圧力」²⁷に

²⁶ Paul Virilio, *Bunker Archéologie. Étude sur l'espace militaire européen de la Seconde Guerre mondiale*, Galilée, 2008, p. 16 [「トーチカの考古学」松畑強訳、『建築文化』1996年3月号]。

²⁷ *Ibid.*, p. 21.

よって、大西洋のトーチカは時代の古層にまで沈んでいったのだった。

したがって、トーチカは建設時から過去のものだった。ナチスのプロパガンダによれば、「大西洋の壁」は自分たちの土地を防衛する民衆の一体性を体現するものとされていたが、実際には、非効率的な防御策を練り上げるために強制労働者たちに課された束縛を示している。この壁は、マジノ線〔フランスの要塞線〕の過ちを繰り返している。ヒトラーはこの巨大な建設を許可したけれども、その訪問は頑なに拒絶していた。戦争が海や空といった区画化されていない空間で展開する以上、これらの浜辺の区画標識はほとんど何の役にも立たない。攻撃が意表をついて素早くなされたり、装甲車や移重爆撃機、機甲部隊、戦車、爆撃機での攻撃が重要視された頃にはこのトーチカの設置は防衛の足手まといとなった。そういうわけで、トーチカはイギリス空軍の爆撃も連合軍の上陸も防ぐことがなかった。トーチカのように物質を強化するのは時代錯誤なことだったのであり、戦争は機動的なものとなり、さらには非物質的なものとなっていた。すでに戦争は警報と弾丸のあいだ、防衛情報と攻撃兵器とのあいだの無限少の時間において実施されていた。かくしてトーチカの唯一の効能は非常用連絡設備にまで縮減された。敵機が到着する前に民衆が身を守るように、できるだけ事前に街のサイレンを鳴らす設備と化したのだった。

都市で身を守ることは、当時、地面の下で地下室に避難することだった。他方で、都市のトーチカは対飛行機用防御の役割を担っていた。これらのトーチカが街の真っ只中にあるということは、あたかもすべての街が海岸沿いにあり、とても脆弱であるかのようだ。「大西洋の壁」とその壮大な無用さが陸地内に回帰し、陸地が海と空の空間と同じぐらい均質化したことがはっきりと示されたのだ。そこからヴィリリオは、戦争が脱物質化されると同時に、戦争が社会を脱物質化すると考える。つまり、戦争が人間が住む土地を空虚な土地へと変形させ、情報と砲撃の速度——最終的にはエネルギーの速度と暴力——だけが重要となるという点で、戦争はすべてを破壊するのである。ヨーロッパで予見され日本で現実のものとなった核戦争への移行は砲撃というものを変容させ、情報と同じぐらい不可視で、光の速度と同じ法則にしたがう放射能に変化させる。「これ以降、大地と人間の施設は拡散する核に完全に曝されることになる」²⁸。

近代建築が用いる流体、つまりコンクリートは、取り返しのつかないほど遅れた

²⁸ *Ibid.*, p. 51.

時間でもって破壊技術の脱物質化にしたがう。コンクリートは凝固し硬化するが、そうした粗野な性質ゆえに核の散逸に耐えられない。核爆発によって人の住めなくなった大気のなかで、コンクリートはあらかじめ埋まっていなければ、人を守ることなく地面のなかに沈んでいく。これは退行へのさらなる一歩だ。大西洋のトーチカが砂にゆっくりと沈んでいくのに対し、地下のトーチカは埋もれた瓦礫という「原史時代」²⁹の姿をひっそりと要求する。トーチカは破壊される前に消えていったのだ。こうしたトーチカの不十分さから別の防御手段が生じ、建築の敗北が他の仕方で見られることになる。例えば、ナチスのロンメル元帥が浸水したノルマンディー平野に数多くの杭を埋めたが、その壊れた建築物の基礎杭は先述したチリのチロエ島の悲痛な光景を先取りするものだった（写真 18）。

来たるべき破壊、すでに到来した破壊をたえず知らせるトーチカは軍事用の建築と民間用の建築の違いを消し去る。飛行機とミサイルの突貫力のために、軍事的な標的と、トーチカで完全に保護しえない街のあいだにある距離はもはや保たれない。そこで軍事用の原子力と民生用の原子力との差、つまり原子力発電所の安全性を信じることは難しくなる。市民用のトーチカが街から離れて〔原発のある〕海や河のほとりに置かれるのである。各々の事故、また事故への応答はつねに時代遅れの非効率な同じ防御策を物語っている。原子炉の上下、その周囲に何千トンものコンクリートを流しに流し込み、発電所の地盤を盛り上げ、その周囲を埋め立てる。その際の合言葉は「地下防御」だ。ところが、グリーンピースのパラグライダー隊は原子炉の屋根の上に定期的に降りてくる。放射能の流出は続き、炉心溶融物は床を貫通し、ミサイル弾にも耐えられるような建物を水素爆発が破裂させている。内側からであれ外側からであれ、コンクリートは核爆発に絶対に耐えられないということは十分に知られている。ただし、一連の原子力事故の間ずっと、私たちは絶えず同じ間違いを繰り返し、しまいには使用済み燃料棒を地下のトーチカのなかに埋めるのである。長期的に見れば、トーチカはもっとも乾いた地面の湿気にさえ耐えられないのにもかかわらずである。

まず、ヴィリリオはこの建築の失敗が、失敗をそのまま示す新たな建築へと道を開くのではないかと考えた。クロード・パランの傍で彼が仕事をしていた時期のことだ。構築の方法を間違いなく変化させる「斜めの機能」に従っているのは、砂に

²⁹ *Ibid.*, p. 63.

埋もれている大西洋沿岸のトーチカだけだった。街中に放置されたトーチカはその粗雑な形によって、戦後の再構築の「建築と都市の冗長さ」³⁰に反対する。これらの石柱体が物語るのは、同時に未来でもある過去、つまり、破壊と同じ時間にある構築なのである。かくして、ヴィリリオとバランは一緒に、ヌヴェール郊外にサン・ベルナデット・デュ・バンレイ教会（写真 19）を制作した。斜線と破断線からなるこの石柱体は、大西洋に沿って点在する「宗教なき寺院」〔トーチカ〕に宗教的な調子を陸地から再び付与している。こうした建築の沈黙によって、破壊の意味は、二人の建築家が抱く「将来への並外れた信仰」と結びつくのである。

しかしながら、こうした信仰がヴィリリオの真の信仰となることはなかった。というのも、彼にとって建築の敗北は対抗しうるものではないからだ。建築の定めとは類似した建物が同じ仕方で再生産されることで消え去ることであり、それらの垂直の障壁が街の拡大を退けることはない。これらの建築物は、さまざまなリズムで増大する速度によって脱物質化される空間の一時的な保管庫にすぎない。ヴィリリオによれば、都市内外の交通、移住の運動、コミュニケーション、テレビからインターネットに至るヴァーチャルなものの支配、エネルギー循環、攻撃技術は世界を脱物質化へと向かわせ、その完全な破壊を成就させる。速度が増すにつれて事故は増加し、最大定数である光の速度にしたがって地平線は閉ざされ、全般的な技術的事故の前触れを示す。人類は時間という壁に当たって碎かれ、最後に消えゆく刹那、現実に出会うというわけである。ヴィリリオが建築における批判的な力を見限って、より非物質的な別の力、革命的メシアニズムと黙示録的著述による批判的な力へ向かったことも理解できる。

しかし、速度がすべてではない。かつて拙著³¹でおこなった証明を再録することはやめて、カントの言葉で要約するだけにしておこう。ヴィリリオは経験を「全般的加速 [accélération générale]」という概念のもとに包摂し、この経験を光の速度という絶対的観念の下で全体化する。かくして、すべての人がカタストロフィの無へと突き進んでいくことになる。最近、同じくカントに基づいてミカエル・フォッセルが黙示録的理性批判を検討している³²。黙示録的理性は将来によって現在を押しつぶし、時間の経過を無にしてしまう。だが、世界を構築する可能性を再び開くた

³⁰ *Ibid.*, p. 18.

³¹ Cf. Jérôme Lèbre, *Vitesses*, Hermann, 2011.

³² Michael Fössel, *Après la fin du monde*, Seuil, 2012, p. 195.

めには時間が必要である。この可能性の開かれについて、フォッセルは見事な具体例を挙げている。ラース・フォン・トリアーの映画「メランコリア」では、地球が今まさに爆発しようとしているときに、なおも子供たちは小屋を作ろうとする。事実、世界の終わりはフィクションにすぎず、トリアーの作品においてはいつも信仰に近いのである。そこで問いが立てられるのだが、信仰が将来に関わるのであれ、将来の欠如に関わるのであれ、信仰のない将来を開く建築とはどういうものだろうか。信仰を欠いていても、建築はカタストロフィを時間のなかに刻むように、カタストロフィを空間のなかに位置づけ続ける。1945年以来、建築は私たちの時代の結び目、つまり原子力とポスト原子力の予想外の時間〔*contretemps*〕をコンクリートのなかに流し込んできた。しかしまた、建築はまさにこの建築の敗北〔*défaite*〕のなかに、この結び目を解きほぐし〔*défaire*〕、原子力に対する距離を回復する可能性をも含んでいるのである。

原子力／ポスト原子力の予想外の時間と建築

ヌヴェールにあるトーチカ状の教会と福島のあいだにどんな距離があるのだろうか。さらに広島を通過するなら、それはほとんど想像上の距離となるだろう。マルグリット・デュラスが脚本を書きアラン・レネが撮った「ヒロシマ・モナムール〔日本語題名「二十四時間の情事」〕」の冒頭で、一方で原爆のきのこ雲を映した耐えがたい映像、被災者たちが瓦礫を撤去しようと奮闘する映像、他方で男の肩におかれた女性の手の映像とが交互に流される。広島の建築家はヌヴェール出身のこの女性にこうくり返す。「君は広島で何も見ていない、何も」。そして、彼女はこうくり返す。「私はすべてを見た。すべてを」。「例えば、病院を見た。たしかに。病院は広島にある——君は広島で病院なんか見ちゃいない」。「ミュージアムを四回……でも、広島のどのミュージアムだったかしら」。

この対話はポスト原子力の建築を、つまり、ひとつの街に関してもはや何も見ることができないという事実を物語っている。なぜなら、街が爆撃によって完璧に破壊され、ついで再構築されて、かくして「他の街と似ていて、もはや区別がつかな

くなる」³³（写真 20）からである。ポスト原子力は爆発の前に始まっている。ギュンター・アンダースによれば、爆撃機のパイロットはあまりに高いところを飛ぶために、彼の目に映る街はもう奥行きもなく、住人もいない。街はすでに荒廃していて、意味を失っているのである。再構築はこの事実を何も変えず、この消失を消すだけだ。「再構築はまさに破壊の破壊であり、同時に破壊の頂点である」³⁴。その帰結として、広島は他のあらゆる街——ロサンゼルス、バーバンク、あるいはサンフェルナンドに似通ってくる。広島はいたるところにあるのだ。原子力時代において、あらゆる街は互いに似通ってくる。街は破壊できないようにみえるが、それは街が再構築可能だからであり、街がその破壊可能性以外の何ものも意味しないからである。この点は強調するべきで、その際には、鶴飼哲が喚起したように³⁵、日本がアメリカとフランスと共に民生用原子力の三角地帯をなしていること、その建築との関連が明らかとなったこと（日本的な家屋、フランス的な機能主義、アメリカ的なビルディング）をグローバリゼーションのなかで見失ってはならない。

こうして、原子力／ポスト原子力の建築はカタストロフィの前後を区別することはない。たしかに、二種類の再構築を区別することはできる。一方に遺産の再構築があり、他方に近代的な再構築がある。前者は何も起きなかった、起こりえなかったようなふりをし、逆の印象に到達する。アンリ＝ピエール・ジュディが確認したスーレヌ・ドゥイという小さな町の例では、付近に核廃棄物の置き場を建設する代わりに、町の遺産を改修するための多大な資金を得ていた。「少しずつ、甚大なカタストロフィの後で再構築された村を歩いているという印象がのしかかってきた」³⁶。同様に、チェルノブイリ近郊では、被爆した地域にある改修された建物のなかで、生活が普段のリズムを取り戻すためにあらゆる手段が講じられた。人々はカタストロフィの後で、それ以前に戻るかのように再構築し、さらにはカタストロフィが起こっている最中に、カタストロフィの真っ只中でさえ、死亡者の数が増えることと分かっているながらも再構築をする。近代的な街の再構築はこのように連続しているという印象を強めるだけだ。実際、再構築は世襲財産のようであり、カタストロフ

³³ Marguerite Duras, *Hiroshima mon amour*, Gallimard folio, 1960, p. 35.

³⁴ Günther Anders, *Hiroshima est partout*, Seuil, 2008, p. 141.

³⁵ Satoshi Ukai, conférence aux « Nuits du 4 août 2011 de Peyrelevalde ».

www.nuitsdu4aout.com/pages/satoshi-ukai-a-propos-de-fukushima-extraite-5659849.html

³⁶ Guillaume Grandazzi, Galia Ackerman et Frédérick Lemarchand, *Les silences de Tchernobyl : L'avenir contaminé*, Autrement, 2006, p. 135.

ィ以前に存在した方針を再び取り上げるだけである。かくして、広島と長崎を含む五十年代の再構築は、機能主義の方針を再び採用した。例えば、広島の建物ガイドにはこう書かれている——広島の街には「さまざまな種類の素晴らしい建築物がある。人々の心をつかむ建物があり、歴史や逸話に満ちた建物がある」。

たしかに病院がある。広島の上空で爆弾が爆発して、病院は跡形もなくなった。しかし、再建された病院のなかでヌヴェール的女性は生き残った人びとを見る。それなのに、なぜ男は、彼女は広島で何も見なかったと言うのだろうか。それは「一時的に生き残った人びと」³⁷がカタストロフィについて何も見ることでできなかった死者のようであり、同時にカタストロフィについて何も語ることでできない生者のようでもあるからである。この人びとは定義上、犠牲者の立場を奪われた犠牲者であり、実際はそうではありえないもの、思考されえないものを述べなければならない。彼ら／彼女らはほとんど補償もされず、手当もされず、復興時には病院以外には行き場がなかったものの、「深刻な病に侵された病人十人のうち、病院に行くことを決心したのは十人に一人いるかいなかった」³⁸。レネの映画のなかで、広島の男性こそが被害者の記憶を体現している。なぜなら、彼は爆発で家族全員を失ったからだ。ただし、この男性は記憶を真に体現しえない仕方ではこれを体現するのであり、「あなたは広島で何も見ていない」という否定的な語りかけによって体現するのである。広島から七十年たった今もなお、各々のカタストロフィの後で、私たちはまさにこの文言を反芻し、生き残った人びとに一人称の語りを委ねる術をもたなければならないのである。

たしかに、広島平和記念資料館はある。「物思いにふけった人びとは、写真や建て直された建物のあたりを散歩していた。やることもなく……」とヌヴェール的女性は言う。この資料館は破壊の記憶を守る再構築だ。建物ガイドによれば、「日本の戦後建築はここから始まる。丹下健三によってデザインされたこの建物は『ル・コルビジェによって提案された形式をアレンジした国際的な様式である』」。このようにして、資料館はカタストロフィの記憶を収め、この記憶を国の遺産のなかに組み込む。これは病院やその病人たちにはできないことだ。そして、資料館は離れたところから、カタストロフィ以前の建築的時間を再開するのだ。建物のファサードは何も示すまいと奮闘している。

³⁷ Duras, *Hiroshima mon amour*, op. cit.

³⁸ Günther Anders, *Hiroshima est partout*, op. cit., p. 155.

しかし、廃墟が残っている……そして広島には、あの象徴的な廃墟——現在は補強された旧産業奨励館と原爆ドームがある。ただし、ギンター・アンダースが示すように、唯一持ちこたえたこの建物を破壊の象徴に仕立てる試みは失敗している。というのも、原爆ドームは全体の一部ではなく、無の残りものだからである。無際限で完全な破壊に対して、象徴的な廃墟などありえない³⁹。全体的な壊滅に対する唯一可能な記念碑とは、廃墟のまま残された、二十万人の死者の墓地であるこの街以外にはありえなかっただろう。

いったい建築の敗北はどこに向かうのだろうか。それはチェルノブイリを経て、現在の福島の実地にまで至る（写真 21）。というのも、破壊によって、何千トンものコンクリートが流される建設現場が生じるのであり、まるで原発を建設したり、その安全性を向上させるときのようである。クロード・パランの『原子の家』の末尾を締めくくるのは建設現場——「目の眩むようなトラックの輪舞」——への讃歌、「見世物と高度な技術が結びつく」⁴⁰原発の建設現場への讃歌である。本文を読まないでこの著作の序文を書いたフランス電力公社の設備部長は、まさにその盲目によってパランには見えなかった真実に触れている。建設現場とそれにまつわる「一連の騒音、乱雑さ、社会の変容が古い幻想を呼び覚ます。民生用の原子力と軍事用の原子力をいまだ区別できない私たちの無意識の奥底に広島と長崎の影が浮かび上がらせるあの古い幻想を」⁴¹。付言すると、ここには区別するものなど何もない。カタストロフィ以後の建設現場、大地と空の輪舞、カタストロフィを食い止めるための絶望的な試み——ときに危険で、反生産的で、不条理な試み——といった見世物（チェルノブイリでは鉛の気化温度 900 度をはるかに上回る温度に達した反応炉に何トンもの鉛が流し込まれた）が示すように、原子力産業全体はそのもともと計算された合理的な計画からしてすでに、市民の安全ではなく原子力の危険を、予防ではなくて予測のできない破壊をその方針に据えている。福島原発の防御を向上させようと東京電力（TEPCO）が新設しているコンクリートの壁でさえこうした方針によるものだ。まるで「ナチスが築いた」「大西洋の壁」のようであり、デュラスの小説『太平洋の防波堤』で、太平洋に対する防波堤を築いた登場人物がその崩壊を目の当たりにする情景のようである。赤坂憲雄はこうした壁の構築の論理

³⁹ *Ibid.*, p. 183.

⁴⁰ Claude Parent, *Les Maisons de l'atome*, *op. cit.*, p. 57.

⁴¹ *Ibid.*, p. 6.

に対して、自然災害への謙虚さの知恵（沖縄の「美ら瘡（チュラカサ）」の伝統）を説いている⁴²。

信仰の祈りではなく、きわめて物質的な希望を記しながら話を締め括ろう。チェルノブイリでは原子力のカタストロフィの影響が政府の否認と抑圧によって揉み潰されたが、日本政府はそのときの教訓を汲んで情報の波を発信しているように見える。だが、原子力の終結は政府の情報からも、国家からも到来しはしないだろう⁴³。多和田葉子や塩谷喜雄を信じるなら⁴⁴、国家が技術によるカタストロフィを自然的なものとし、被災者にも原発に反対する人びとにも言葉を与えないだけに、なおさら原子力の終結は国家からやってくることなどない⁴⁵。死者と病人の数を思い出すこと、生き残った人びとの言葉の可能かつ不可能な我有化（彼らの哀願と表現しうるだろう）⁴⁶、市民によるデモ——そのプラカードはヌヴェールの女性が広島に撮影しに来た平和デモを連想させる——は、政治的解決策に多大な影響を与えるさらなるチャンスとなる。ただ、原子力政策の舵取りをする者たちを経済への盲信から本当に目覚めさせるのは、収束の目処が立たない福島現場が抱える計り知れないコストなのかもしれない。東京電力は破産状態で、壊れた原子炉に費やされる何トンものコンクリートが、原子力で稼いだ黒字をかるがると凌駕している。同じく、原子炉を冷却するために用いられる何トンもの水は、投資家たちの以前の熱気を冷ましてしまう。また、原発の除染は数年を要し、それ自体が数々の危険を孕んでいる。渡辺一夫は「狂気なしでは偉大な事業は成し遂げられないと申す人々もいます。それは嘘であります。狂気によってなされた事業は必ず荒廃と犠牲を伴います。真に偉大な事業は狂気に捉えられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって誠実に地道になされるものです」⁴⁷と言ったが、この言葉が

⁴² Akasaka Norio, « Toi, créature de l'autre rive... », in Coll., *L'Archipel des séismes*, op. cit., p. 121 sq. [「海のかなたより訪れしもの、汝の名は」、『群像』2011年5月号]。

⁴³ Ulrich Bech, *La Société du risque*, op. cit., p. 480 sq.

⁴⁴ Cf. Yoko Tawada, *Journal des jours tremblants*, p. 92, p. 94 et Shioya Yoshio, « La centrale nucléaire de Fukushima... », in Coll., *L'Archipel des séismes*, p. 71 sq. [「福島原発、安全からの逃走の果てに 消えた「自主」「民主」「公開」」、『みずす』2011年5月号]

⁴⁵ Yoko Tawada, *Journal des jours tremblants*, op. cit., p. 92 et p. 94.

⁴⁶ Cf. Kakuta Mitsuyo, « Ne pas céder au silence... » in Coll., *L'Archipel des séismes*, p. 154 sq. [「角田光代さん 被災地へ」、読売新聞2011年4月21日朝刊]。こうした我有化に関しては、Svetlana Alexievitchの忘れがたい著作 *La Supplication* [「哀願」] がチェルノブイリの証言を扱っていることを指摘しておきたい。

⁴⁷ Cité par Ôe Kensaburô, « Adieu au nucléaire ! », in Coll., *L'Archipel des séismes*, p. 205 sq. [2011年

示すような知恵が具体的に結集されなければならないのである。建築の敗北は勝利をもたらすとは言わないが、少なくとも徹底的な抵抗の力によって変化しうるのである。つまり、原発の現場以上にひどくコストのかかるものはないのだ。一般的等価性たる金銭はあらゆる自然と人為のカタストロフィを等価にしようとする。ジャン＝リュック・ナンシーによれば、カタストロフィが等価となるなかで、それぞれのカタストロフィの特異性において、個々の実存の法外な〔*hors de prix*〕威厳において、その最初の抵抗も見出されるのである⁴⁸。付言しておく、原発のカタストロフィは等価性そのもののなかに還元不可能な非等価性——値段がつけられないもの〔*hors de prix*〕——を突如つくり出すのである。電気生産事業者はその甚大なコストを合理的に予想し⁴⁹、トーチカの論理の不条理さは脆弱な建物と交代すべきである。というのも、カタストロフィを前にして、脆弱な建物こそがもっとも堅固な建築だからだ。いま生きている人びとのための建築、その人々の DNA 構造〔*architecture nucléaire*〕を彼／女らの奥底で維持する建築。忘れないでおう、原子力の建築〔*architecture nucléaire*〕と DNA 構造は〔フランス語では〕同じ名である。DNA 構造は安定しつつも脆弱であり、生物が自分のリズムで変化しながら自己を維持することを可能にする。DNA は原子力が目に見えない仕方破壊する第一の建築物なのである。

補遺 欧州加圧水型炉（European Pressure Reactor : EPR）型原子炉の安全性⁵⁰

欧州加圧水型炉型原子炉は内的ハザードや外的リスクに際して、環境と付近住民の安全性を確保するべく考案されている。最大限の安全を保障するための要件は以下の通りである。

9月19日、東京・明治公園での「さようなら原発5万人集会」における大江健三郎のスピーチで引用されたもの。

⁴⁸ Jean-Luc Nancy, *L'Équivalence des catastrophes*, Galilée, Paris, 2012〔『フクシマの後で——破局・技術・民主主義』渡名喜庸哲訳、以文社、2012年〕。

⁴⁹ もちろん、原発事故以前にこうした議論はできたはずだが、不幸なことに、カタストロフィが起こってはじめて具体的な議論が有効となる（cf. Ikezawa Natsuki, « vers une pauvreté sereine, in Coll., *L'Archipel des séismes*, p. 263）。

⁵⁰ <http://www.areva.com/FR/activites-5356/la-securite-du-reacteur-epr-en-fref.html>

重大なリスクへの耐性

- ・外側からの攻撃による直接的な衝撃と、それに付随して起こる振動に耐えうる強固な格納容器。
- ・地震の場合、地面の揺れに耐えるために、最低地にある施設を支えるコンクリート製の基盤。

強力な冷却装置

- ・物理的に分離された四つの独立した安全システムだけですべての安全機能を確保。そのうち二基は飛行機の墜落に耐えうるシェルで保護され、残り二基はその物理的な配置によって保護されている。
- ・大量の冷却用水を蓄えることによって、一次・二次回路を通じたシステムの直接冷却が可能。
- ・冗長性のある専用システムが冷却する、隔離して保護される使用済み燃料棒用プール。
- ・冗長性、多様性、分離の原則にしたがう、適応性のあるデジタル分散制御システム。
- ・停電時に冷却回路への電力供給を保証する、分離して保護された多様な緊急用ジェネレーター。

環境リスクに対する予防

- ・安全バルブと自己触媒再結合バルブを利用して圧力と水素の制御を強化。
- ・非常に低い確率で起こる炉心溶融も見据えて、炉心溶融物を堰き止める先進的なシステム。
- ・放射能を防ぎ、高温や高圧力に耐えうる気密性の高い格納容器。

Jérôme Lèbre, « Architecture nucléaire/post nucléaire : construire dans la catastrophe »

翻訳＝清水雄大（リール第三大学・博士課程）、西山雄二（首都大学東京・准教授）



写真 1
 画像提供：田中功起
 Courtesy of Koki Tanaka



写真 2
 画像提供：田中功起
 Courtesy of Koki Tanaka



写真 3

画像提供：国際交流基金

Courtesy of The Japan Foundation



写真 4

画像提供：国際交流基金 写真：畠山直哉

Courtesy of The Japan Foundation Photo: Naoya Hatakeyama



写真 5



写真 6

画像提供：国際交流基金 写真：畠山直哉

Courtesy of The Japan Foundation Photo: Naoya Hatakeyama



写真 7



写真 8

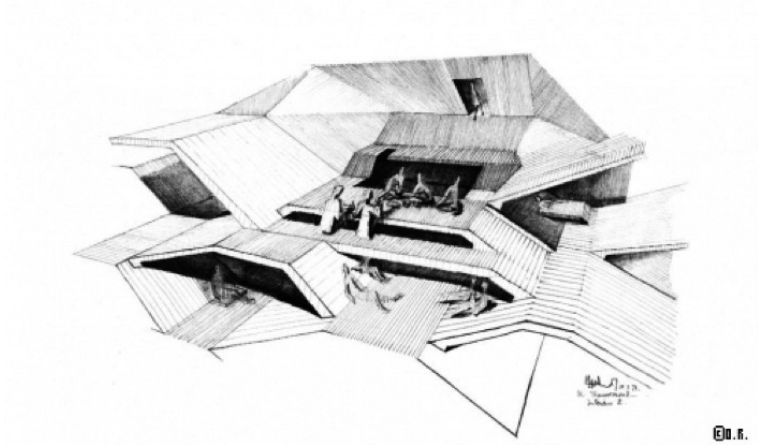


写真 9
Courtesy of Claude Parent

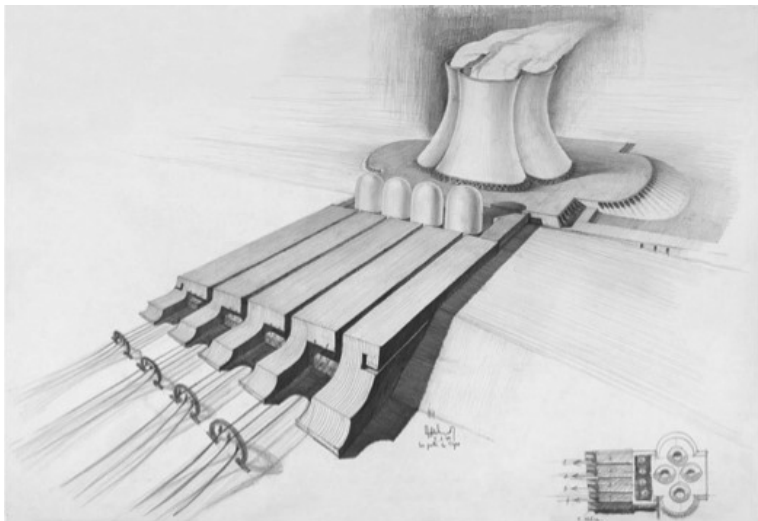


写真 10
Courtesy of Claude Parent



写真 11

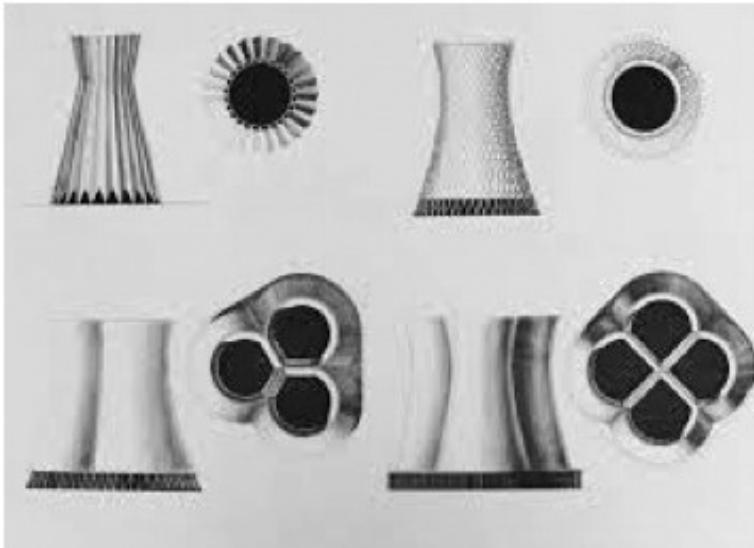


写真 12
Courtesy of Claude Parent



写真 13



写真 14

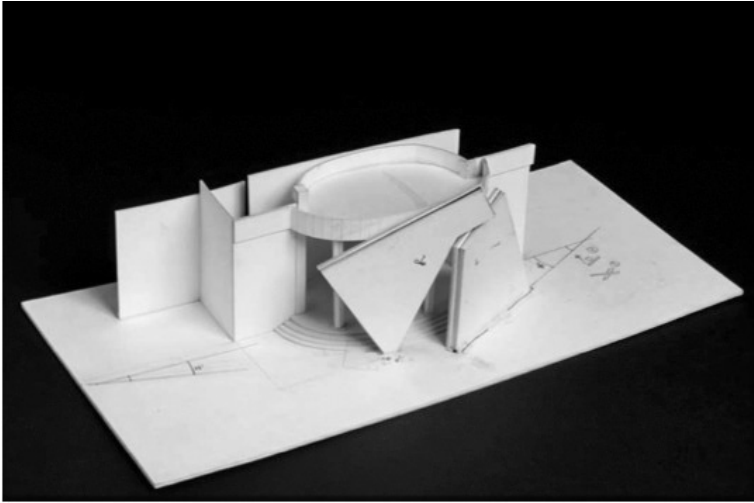


写真 15
Courtesy of Claude Parent



写真 16
Courtesy of Claude Parent



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21